

501 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 渡邊海人

震災当日、自分は小学⁴年でした。放課後、みんなといっしょに音楽室で、鼓笛の練習をしていました。今でも地震が起きたことは、よく覚えていきます。すぐに机の下にかくれたものの、あれほどゆれが激しい地震は、経験したことがありませんでした。すぐに外に出るよう先生に言われて避難は完了しました。しかし、数時間後、高台から下を見た時、絶句しました。町が水がたしになっ、ていたからです。さすがにあの光景を見た時には、体がふるえました。その時、正直なところ、自分は、もうダメなんじゃないか? と思いました。しかし、約3年の時がたつ、もうすぐ4年目をむかえようとしている今日、本当に復興、復旧は進んでいると思います。新しい施設がたったり、家もたちならい、日々、復興は進んでいます。しかし、どうしても、震災前の家に戻れたらと思います。これは、かりは、どうしても、かなわぬ願いですが思、てしまいまち。昔の磯部を、もう一度見たいです。

502 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 渡辺 貴也

ぼくが小学四年生の時に東日本大震災が起
 きました。その時ぼくは、教室で宿題をして
 いました。そして小さな揺れを感じ「別に大し
 たことはない」と思いました。しかし、突然ゆ
 れが大きくなり立ちこけられなくなるほどの
 揺れでした。そして、^皆いっせいに階段を降
 り、外に避難しました。

ぼくは、外で避難している時海から音がして
 きました。「なんだらう」と見てみると磯部
 の町が津波にのみこまれていたのです。

あまりの光景にぼくは、地面にひざをついて
 しまいました。そしてその後も余震が何度も
 続き、学校で不安な一日を過ごしました。

朝になると、太陽が学校を照らしてりました。
 そして、ぼくは海からもっと遠くに離れた避
 難所にバスで移動しました。避難所では家族
 が無事だったのが良かったです。けれど、家族や
 友人を失った人たちがあんなに心ばかりとて
 もいたかったのです。せくな、人たちの分ま
 りし、かり生まれてこうと思います。

503 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 海月 奈々

あの時私は、四年生で用事があったので家に
 帰りました。その時私は、震災を体験しま
 した。家から海が見えるので迫りのある津波
 を見ました。中には、下半身かどろで汚れて
 いたりした人もいたり体が不自由で動けな
 い人の様子を見たり元気づけている人もいま
 した。私は、なにもできずにただそれを見て
 いることしかできなくてなさけないなと思
 いました。余震がおさまってきたときに知り
 合いの人が、迎えに来てくれたので、その
 人の家に泊まらせてもらい水道は止ま
 っていたけど、そのほかの部分では、普通
 でした。色々な業者の人や地域の方か頑
 張ってやっていたので、その人達に感謝
 していきたいです。

504 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 齋藤 愛奈

私が4年生の時に1000年に1度といわれる東日本大震災が発生しました。その時私はコンピューター室で鼓笛の練習をしていました。発生後は小学校に避難しました。それから間もなく津波が発生し磯部の海沿いの地区は大きな被害を受けました。そのため、磯部の高台の地区は周りが浸水し孤立し、相馬市内の避難所に避難したのはその翌日でした。その体験を通して私が思ったことはいつ何が起きても対応できるように備えておくということが大切ということです。磯部地区の避難所は、低い海沿いの地区に囲まれているので津波などが発生した時、孤立してしまう可能性が高いです。なので備えがあれば安心して避難ができます。

私はこの経験を生かして、次何があっても困らないように備えをし、かりしておきたいです。

私が東日本大震災にあったのは小学4年生のときです。私が帰りの用意をしているとカタカタと音がしました。地震と思うままもなく大きな地震が私たちを襲いました。机はおれ、棚から物は落ち、電気が消えそれはとても恐ろしい体験でした。4年がたとうとしていゝる今でも鮮明に覚えていゝます。その一時間後に津波が押しよせ、今まで見てきた、住んできた地区があとかたもなく消えてしまいました。本当に夢かと思ゝいました。夢であつてほしゝいと思ゝいました。

これらのことあり私がこれから後世に過去にこんな悲惨な出来事があゝ、たと伝えていゝきたいです。またこのことをくり返さないために日ごろから防災意識を高くもち生活してゝいゝきたいと思ゝいます。

あの日は、家から出て逃げようとしていました。その時、突然大きな揺れが起こりました。私は妹と祖父と祖母と家から離れたのですが、家の瓦が崩れ落ち、私の近くにも落ちてきました。その後、家より高い所へ移動しました。その場所から海を見てみると、海に巨大な黒い壁のようなものが2枚まわりました。それは津波でした。その後は恐くてとても見る事ができませんでした。おそらく、その5分後ごろに多くの方が暮らしてきて磯部の町が壊れてしまったのだと思います。

今は、高台などに新しい家が建てられてきています。私は将来、建築士として復興に関わりたいと思っています。

507

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 渡辺 智也

私は2011年に東日本大震災を経験しま
 した。私の家からは津波が見え、家や建物が
 流さ小子の姿見て頭が真っ白になりこの先ど
 うなるのかと思いました。それからしばらく
 は立ち直ることができずとても不安な毎日で
 した。しかし、私の好きなバレーボールをし
 ている時だけは、つらい事を忘れられました。
 そして、私はバレーボールで磯部地区を元氣
 にしようと思いました。その年に福島県大会
 で2位になり東北大会に出場することができ
 ました。磯部の方々に勇気と感動をあたえることが
 できました。それ以降、私は自分の好きなバ
 レーボールで地域の方々に元氣をあたえたい
 と思いました。

この東日本大震災の教訓を忘れない、次の
 世代の人々に伝えていきたいです。

508 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 阿部 穂波

2011年3月11日大きな地震と津波が
 磯部地区を襲いました。その当時私はトラン
 ペットの練習をしていました。地震がさいお
 んなで机の下にかくれました。一緒に外に避
 難した友達の弟が家に帰る、津波にのみこま
 れてしまいました。その友達ものみこまれて
 しまいました。ショックでした。その日の夜は
 電気もガスも通らずストーブの明かりだけを
 たよりにして過ごしました。なかなかおさま
 らない余震がともこわかったです。しばらく
 して学校が再開しました。震災前の生活と
 は一変しましたが、徐々に戻っていきます。
 そして復興に向けて頑張っています。

私は、たくさんの方々に支援していただき、
 こころまでくちかいたの感謝の気持ち
 も忘れないう頑張っています。

509 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 荒 南未

あの東日本大震災の日、私は友達と遊んで
いました。いつも通り話しをしながらおやつ
を食べていた時急にとても大きな揺れにおそ
われました。友達のおばあちゃんに言われた
通り、私達は布団に隠れて揺れがおさまるの
を待っていました。揺れている間は何分経
たかわからないぐらい長く感じました。それ
から学校に送ってもらい、家族と再会しまし
た。そのあと小学校で余震の中、全然おぼれ
ないまま一晩過ごしました。

今でも津波のこうけいは絶対忘れません。
もしこれから先もこのような災害がいつくろ
かわからないので、この経験が無駄にならない
ように、命を大切にしたいです。

510

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 蛭原 葵絵

東日本大震災から約3年8ヶ月。今は磯部
もがれきがなくなり、新しい道路や建物が増
えてきました。しかし磯部に家を建てること
はできなくて磯部はだんだん人が少なくなっ
てきました。私が通っている磯部中学校も生
徒の数がだんだん減ってきています。小学校
も人数が減ってきています。もっと磯部に人
が集まるように、私達が大人にならば、自ら磯部
を、もっと、いいところにしたいです。また、
磯部にもっと人が集まって震災前のよくなる
てほしいです。

511 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 大谷 希亜

私は震災当時、小学校で放課後の時でした。
 地震が起きて机の下に隠れても上下左右にゆ
 れて、身動きができなくて大変でした。その
 日は避難して来た人たちは学校へ泊まりました
 た。食べ物は朝まで出ずに、おなかをすかせ
 ていました。

次の日のお昼頃に避難所へバスで行ったら、
 たくさんの人で人口密度が高くて大変でした。
 その後、他県の方から支援を頂きました。

そのおかげで、とても助かり支援してく
 くれた方には感謝しています。

その感謝は一生忘れずにいます。勉強
 なども部活を頑張りました。そのことを頑張
 り、感謝の気持ちが届くといいと思います。

512

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 菅野美奈

私は、現在相馬市に住んでいますが震災前
 は南相馬市に住んでいました。私は震災当時
 小学5年生でした。急にきた地震にものすご
 く驚きました。今までに体験した事のないゆ
 りでものすごく怖かったです。次の日には、
 原発が爆発し家族と一緒に相馬市に避難して
 きました。相馬市には震災の3日前に産まれ
 た弟がいたので遠くには避難する事ができま
 せんでした。私は原町の学校から相馬市の学
 校に転校をしました。その学校は相馬市の中
 心で一番に被害を受けた地域にありました。
 その学校のほとんどは津波により家が流され
 中には家族を失った生徒もいました。家を
 流されてなく家族も無事だった私が通った
 いのがなという不安もありましたが、その学
 校の生徒は私を温かく迎えてくれました。
 その中でも私に一番最初に声をかけてくれた
 子がいました。その子とは今でも大親友です。
 そして私は、震災を通してたくさんの方に支
 援してもらった。感謝の気持ちを感じては、け
 ない。と思いました。

(20文字 × 20行)

513

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 鎌田百子

私	は	震	災	が	起	こ	、	た	時	友	人	と	一	緒	に	帰	っ	て		
い	る	途	中	で	し	た	。	そ	の	時	に	地	震	が	き	て	私	達	は	
と	、	さ	に	し	ゃ	か	み	こ	み	ま	し	た	。	私	は	一	緒	に	帰	
っ	て	い	た	女	の	子	と	抱	き	合	、	て	地	震	が	お	そ	ま	る	
の	を	待	っ	て	い	ま	し	た	。	そ	れ	か	ら	少	し	し	て	か	ら	
地	震	が	お	そ	ま	り	ま	し	た	。	ま	わ	り	を	見	わ	け	た	し	た
ら	、	さ	、	き	の	地	震	で	壊	れ	た	と	お	も	わ	れ	る	も	の	
か	た	く	た	人	目	に	つ	き	ま	し	た	。	そ	の	時	二	回	目	の	
地	震	が	き	ま	し	た	。	そ	の	瞬	間	、	さ	、	き	の	地	震	で	
壊	れ	た	建	物	や	ブ	ロ	ッ	ク	の	壁	な	と	か	一	気	に	く	お	
ち	て	き	て	破	片	な	で	か	降	っ	て	き	ま	し	た	。				
私	は	こ	の	よ	う	な	経	験	を	他	の	人	に	し	て	ほ	し	く		
な	い	と思	っ	て	い	ます	。	そ	の	た	め	に	復	興	は	重	要			
だ	と思	っ	て	い	ます	。	私	も	大	人	に	な	っ	て	働	く	よ			
う	に	な	、	た	ら	少	し	で	も	カ	に	な	れ	る	よ	う	に	な	り	
た	い	です	。																	

(20文字 × 20行)

震	災	で	私	は		大	変	な	こ	と	も	た	く	さ	ん	あ	り	ま
し	た	が				そ	れ	以	上	に	友	達	の	大	切	さ	や	
地	域	の				つ	な	が	り	の	大	切	さ	を	学	ぶ	こ	と
が	で	き	ま	し	た	。												
他	の	県	に	あ	る	施	設	や	学	校	か	ら		手	紙	や	支	援
物						資	な	ど	が	届	き		温	か	い	気	持	ち
に	な	り	ま	し	た	。												
私	が	通	う	学	校	で	は		家	を	流	さ	れ	た	人	が	納	り
割						ほ	ど	で		ど	ん	ど	ん	転	校	し	て	い
っ	て	し	ま	っ	た	り												
家	が	ど	ん	ど	ん	減	っ	て	人	口	が	半	分	ほ	ど	に	ま	で
な	っ	て	し	ま	い	ま	し	た	。	で	す	が		以	前	よ	り	も
地	域	の	つ	な	が	り	を	大	切	に	す	る	よ	う	に	な	り	
こ	れ																	
か	ら	も	磯	部	の	つ	な	が	り	が	絶	え	な	い	よ	う	に	し
て																		
い	き	た	い	で	す	。												

私は、東日本大震災の時に家族とすごして
 いました。地震が起きる前は、小学校で友達
 と笑いながら話していました。そして一緒に
 話していた友達とは一生の別れとなってしま
 い、それを知ったのは、数日後でした。私は
 家族全員でいたのとき、とみんなも大丈夫だ
 ろう、なんて甘く考えていました。そうする
 ことでしか不安を消すことが出来ませんでした。
 た。

家は、しっかり残っていて、今でもその家
 に住んでいます。あの時とかわらないものは
 無く、森は復興のために切られ、少し高い丘
 から見える海はまだキレイにはなりません。

私は、こんな出来事はくり返してほしくな
 いです。大切な友達を失う怖さ、大好きな景
 色が変われた悲しみは一生消えませんが、今生
 きていることを大切に生きていこうと思いま
 す。

516 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 高玉 祐奈

2011年3月11日、あの日から私たちの生活は一変しました。私は、あの時友達と静かに放課後の活動をしていた。突然あの大きなゆねが私たちをおそいました。それは、今までに体験したことのないとても大きなゆねでした。さらに、大津波が私たちの町をのりこめました。同級生も七くたりしました。

あの日から、はや4年が経とうとしています。私たちの町もゆっくりにあっていますが、確実に復興していています。今、復興しているのは大人の人たちです。これから復興していくのは私たちです。私たちは、この町の復興をするために立派な大人にならなければいけません。しっかりと着実に復興していきたいと思えます。

517 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 髙島美奈

私は当時学校にいきました。そのため先生達の指示のおかげで無事でした。ですがまだ夕方にはたか、たか家族のオムタは、仕事に行き、下り、保育園に行き、下りバラバラだ。そのため自分のこともそうでしたが、家族のことが心配でした。そう思っていた時津波がきました。波は私の地域がのまわっている瞬間は見れませんでした。跡を見てもうすぐ心が痛くたりました。私の家は高台だ。そのため幸い残りでしたが、私の友達の家、親戚の家などたくさん思い出が、た地域が、が来きけりけりさら地になった、てしまいました。今ではが来きせ片づけられ雑草はたくさん来りてが来きせにたりました。元に戻すことは難しいかもしませんが、少しも震災前に近づけらるるほうに頑張ってもらいたいです。

518

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名

細田 瑞生

東日本大震災発生前、私はクラスの何人かと教室で勉強やおしゃべりをしていました。土日はどう過ごすのかな、友達と遊ぶに行こうかな、などと話し、直前までありふれた、それについて幸福な明日も来ると信じて疑いませんでした。そんな私達から津波はすべて、住む家、かけかえのない友達、来るはずだった幸せな明日、その全てを奪ってしまいました。私の家では奇跡的に死者は出ませんでした。住んでいた家を失い、現在は仮設住宅に住んでおり、元いた家のある地区にはもう戻れません。

私達から一瞬にして全てを奪って、また大震災。き、と完全な復興を果たすまではとても長い時間がかかると思います。しかし、私は、私達一人一人が大震災で失ったものをとり戻す、それ以上にすばらしいものを手にする事が復興につながると思います。一瞬にして消えてしまった様々なもの。しかし、き、と長い時間と努力でき、ととり戻せます。

520 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 大竹彩花

東	日	本	大	震	害	、	あ	の	悪	夢	の	さ	う	な	出	来	事	分	
ら	3	年	以	上	が	た	ま	ま	し	た	、	そ	の	時	私	は	ま	だ	小
学	4	年	生	だ	た	の	で	、	地	震	が	起	き	る	と	、	怖	い	
、	な	ん	で	私	が	こ	ん	な	目	に	合	お	合	さ	ま	い	け	な	い
の	、	と	い	う	思	い	で	日	々	を	過	ご	し	て	い	ま	し	た	。
し	か	し	、	時	が	た	ま	に	う	れ	て	ま	っ	と	大	変	で	、	怖
い	思	い	を	し	て	い	る	人	が	い	る	こ	と	に	気	が	付	き	ま
し	た	、	す	る	と	、	苦	し	い	思	い	を	し	て	い	る	人	が	い
る	の	と	、	私	は	安	全	な	場	所	で	毎	日	暮	ら	し	て	い	る
ん	だ	た	、	と	い	う	思	い	が	こ	み	上	げ	て	ま	て	、	胸	が
し	め	つ	け	ら	れ	ま	し	た	、	そ	れ	は	今	も	同	じ	で	、	テ
レ	ビ	シ	ヤ	新	聞	な	ど	で	信	息	し	て	い	な	い	節	や	、	悲
し	そ	う	な	人	々	を	見	る	た	か	に	、	胸	の	奥	が	キ	レ	ッ
し	め	つ	け	ら	れ	る	よ	う	な	身	が	あ	る	の	で	う	。	し	か
し	、	復	興	の	進	ん	で	い	る	の	も	事	案	で	、	少	し	ず	つ
で	は	あ	る	ハ	と	、	明	る	「	福	島	に	も	ど	、	て	ま	て	い
る	と	思	い	ま	す	。													
こ	れ	か	ら	手	き	て	い	く	中	で	東	日	本	大	震	災	を		
忘	れ	な	い	こ	と	が	、	私	達	に	て	ま	る	復	興	支	援	の	
で	は	な	い	か	な	あ	、	と	思	い	ま	す	。						

521 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 鈴木謙志朗

今から約四年前の三月十一日に東日本大震災
 があつた。という事実は日本や世界の人々に
 も情報か伝わつたけれど、あまり頭に入つて
 いる人は少ないと思ひます。ですが、その時
 の地震と原発事故による放射線を体験した
 僕達や福島県民の頭の中には、とても鮮明に
 かつ残酷に、画像ではなく動画として今も残
 つています。被災地以外の人々は新聞やニ
 ュース、テレビなどでこの事を知つたと思ひ
 ます。そしてその写真や映像の中には津波
 や地震により崩れ落ちる建物やケガをした人
 などが写されてゐたと思ひます。確かにこの
 ような物を見れば、被災地に必要な物は建物
 等だと思つてでしょう。ですが、私達からする
 と、今一番必要な物は「心のサポート」だと
 僕は思ひます。それは、実際に体験してみな
 いと分からなひ心の痛みをやわらげてくれる
 事です。だから被災地以外の皆さんも私達
 の立ち場になつて考えてみてはどうでしょう
 か。

522 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 國井愛菜

私は、東日本大震災という大きな地震を
4年前体験しました。この大きな地震で学ん
だ事があります。

1つは、家族の大切さです。津波におそわ
れた県では、たくさんの人々が亡くなると
いうテレビでのニュースをみて、家族がいな
くな、てしま、たら「いやだ」と強く思いま
す。命も家族の大切さに気づきました。

次に、私は、復興という言葉^づを東日本大震
災で初めて学びました。それが今では、私も
復興という言葉がとても大切なんだと思いま
す。私が考える復興とは、東日本大震災前の
日本にもどす、という事です。

最後に、今私がかを人れるべきことは、仮
設住宅にすんでいる人を自分の家にかえすた
めにぼきん活動などを積極的におこなう事と、
放射せんばたくせんある場所を呼びかける事
みんなのやくにたつ事をしていきたいです。

523 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 市川 葉々子

いつも通りに過ぎていくと思っていました。
 3月11日... たった一瞬で気変した東日本... 原
 災まで爆発してしまっただという現実には私は、
 まだ幼く難しい事が分からないうえ、たあの頃で
 も、なぜかすごく叔達大丈夫なのかが... という
 ような怖さと不安が心の底からじわじわとく
 る感じがしました。そのような状況からでも
 そこに立ち止まらずにあきらめずに、ただ前
 に進み今のように復興する町や市などがあり
 立ち止まっていれば何もできない、負けたい
 という強い気持ちを感じました。そして、衆
 災当時食への物などがなくなった時も、食への物
 のありがたさや感謝の気持ちを持つ事の大切
 さと、いろいろな事を学びました。また、被災
 されていない人々がいるという現実には、すこ
 く悲しいけれど、私達はまだまだ幸せな者の
 人々の分まで精一杯生きる必要があると思っ
 ます。だから私は今この世界に自分がいるこ
 と感謝し、周りの人に感謝し、そして何より
 親に感謝しながら生きていきます。

524 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 藤田 萌愛

私は当時小学生でした。今まで体験した事
 のない恐怖に襲われました。外は灰色の雪が
 降ったりして、私は夢下も見ているのかと思
 っていました。テレビをみていると行方不明者
 が次々増えていき、私は「早く見つかって欲
 しい」と思いました。また、地震を絶対に悔
 いてはいけません。そう学びました。
 そして現在、福島県や仙台市など、復興す
 る事が出来た地域がある中、今でも避難区域
 にある場所があり、今でも仮設住居で暮らし
 ている人達は多いです。お年寄りはその
 によりストレスで亡くなっている人も多くな
 っています。本当にこのままでもいいのでし
 うか。私は絶対に嫌です。しかし私はまだ子
 供なので、出来る事は限られています。しか
 しその数少ない出来る事を精一杯行いたい
 です。そして今後また大災害が行った場合、周
 りの人と助け合い、残念なから亡くなってい
 ます。大人数が少しでも減るよう一人一人が考え
 て行動する事が大切だと思います。

525 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 中川 涼可

東日本大震災にあって被害を受けた建物や
 人々。表向きには復興したと思われているが
 まだたくさん苦しんでいる人はいるし壊れた
 ままの建物もたくさんある。福島県の沿岸部
 は原発のせいで全くと言って良い程復興の進
 んでいない地域が複数ある。
 家に帰りたくても帰れないのはとても辛い
 だろう。その人達の気持ちと私は少しなら分
 かる。私自身、震災でおぼと住んでいた家が
 とても住めるような家ではなくなると経験をし
 た。辛い近くに空き家がありそこに今は住ん
 でいるが思い出のある家をなくすのはとても
 辛い。た。おから少しだけ気持ちは分かる。
 今でも仮設住宅で生活したりと大変な思い
 をしている人がいるのにその現状が風化して
 いくのはおかしいと思う。日本中の人達が小
 さなことでも良いから協力して被災者の方々
 を救おうとする心こそが大切で忘れてはいけ
 ないことだろう。私は完全に復興するまで精
 一杯自分に出来ることをやるうと思う。

あ	の	時	の	事	は	4	年	た	。	た	今	で	も	は	。	さ	り				
と	覚	え	て	い	ま	す	。	3	月	1	1	日	。	小	学	六	年	生	の		
僕	に	は	と	て	も	怖	い	体	験	を	し	た	。	余	震	は	。	毎	日		
の	よ	う	に	あ	り	。	放	射	能	と	言	う	え	た	い	の	知	木	な		
り	も	の	へ	の	不	安	で	小	学	生	の	僕	に	は	何	う	何	だ	か		
分	あ	り	ま	せ	と	し	た	。													
他	県	の	人	は	過	去	の	事	と	思	い	あ	の	時	の	事					
を	忘	め	て	い	ま	す	と	し	ま	う	。	過	去	と	言	う	の	は	。	事	
実	に	す	ま	ま	せ	ん	が	。	そ	の	事	実	を	後	世	に	伝	え	て		
い	く	の	が	私	も	う	の	義	務	な	の	と	は	な	い	が	と	僕	は		
思	い	ま	す	。																	
今	。	福	島	県	の	復	興	は	少	し	づ	づ	と	は	あ	り	ま	す			
が	。	前	へ	前	へ	と	進	ん	で	い	ま	す	。	決	し	て	早	い	と		
は	。	言	え	ま	せ	ん	。	復	興	し	た	と	し	て	も	。	何	が	ル		
の	中	に	ほ	。	が	り	と	穴	が	空	い	て	い	る	よ	う	な	気	が		
し	ま	す	。	そ	も	は	。	あ	の	時	の	怖	さ	や	不	安	が	と	思		
い	ま	す	。	あ	の	い	。	ひ	り	ん	ひ	り	ん	ひ	り	ん	を	と	こ	え	
が	ら	し	て	い	ま	す	。	た	ら	が	危	い	と	思	い	ま	す	。	こ	も	が
ら	の	フ	ク	シ	マ	の	た	め	に	も	。										

527 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 藤 百佳

あの日、私は二つ上の先輩の卒業式予行
 練習で体育館にいました。窓やドアはがたが
 たりいいながら次々と倒れていきました。家に
 帰ると家の中はお皿や本などが落ちていて危
 なく入れませんでした。雨での生活が始ま
 りました。そこで「今までは通じと思、マ
 た事は余りありませんよはいんだ」と言付
 きました。
 今は地震が起きる前の様にまど、マは
 けまど全て元通りにね、たけけマはありませ
 ん。私の親せきはまだ沖縄に避難したまり帰
 っ来ません。そういう人がまだたくさんい
 ます。今まで一緒に震うしていた人がまた仮
 設住たくにいたり前の様に全てまど、マは
 ません。そこで今、力を入れなければならな
 いことは、津波で流れた木などがです。その木
 を取り除けば少しはきれいになり、人が住め
 るのではないかと考えました。そのためには
 ボランティアが良いと思います。私も進んで
 ボランティアをしていきたいです。

528 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 沼田 光輝

今年、神戸が、「阪神・路大震災」から復興20周年を向かえました。20年たった今、なぜテレビや新聞で取り上げるのかそれは、「風化」を防ぐためです。被災者の苦しみは一生消えないと僕は思います。では、僕はどうかでしょうか。

僕は、福島県白河市という所に住んでいます。栃木県の近くあたりに住んでいるので、同じ福島県といえども原発をあまり意識をしなかったことはありません。震災当初は、当然恐怖や不安が続きまわりました。外で体育ができません。地元の野菜が食べられない、色々な事がありました。しかし、今はそんなことも考えずに平和に暮らしています。そんなある時テレビのニュースを見ると色々な所で原発の影響が起きていることに気付きました。気付いたらもう他人事とは思えなくなりました。「この震災の事を忘れずにはいられなければならぬ時に記憶がうすれてしまう。この風化のおそろしさを改めて学びました。

529 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 鈴木流星

僕はこの震災を通して様々なことを学ぶことができました。その中でも一番感じたのは人の命の大切さです。僕たちは、二十年前に阪神淡路大震災を経験せずにこの東日本大震災を受け、たくさんの人々が亡くなり、とても悲しい気持ちになりました。そこで、人の命の重さがどこだけあるかと考えたら、これだけの地震で亡くなってしまう人の分まで、自分は長くそして勇しく生きようと強く思いました。

また、なぜ阪神淡路大震災の影響で失われた震災を取り戻すのに、早く終えることができたのに東日本大震災で失われた震災を取り戻すのに、未だに原発問題が片付いていないのだと、疑問でいっぱいです。また、それはこの震災で亡くなってしまう人々にとても失礼な行為だと思います。だからこの震災で失ってしまったものを全国の人に知ってもらったために福島からできることやっています。

530 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 根本 彪 琉

僕は、カゼを引いて学校を休んでいた。
 すると、突然大きく揺れ始めた。僕は、ひっ
 くりしてしばらく座っていた。すると、部屋
 の中が一瞬で泥棒に散らかされた後のようた
 った。一人た、たから、とても怖かった。
 その後、原子力発電所から放射線が空気中に
 広がった。そして、多くの人さまさまな事
 に問題を抱え、今も仮設住宅で暮らしている
 人がいる。
 東日本大震災が起きてから、もうすぐで4
 年を経とうとしている中、復興はどのくらい
 まですすんだのか。放射線が多く含まれてい
 る土やがれき・地割れなどの処理することは
 出来た。しかし、処理したものをとくに置く
 か仮設住宅に住んでいる人・除染作業などが
 まだ解決していない。また、自分の家に帰っ
 てあの日のように家族と一緒に生活したいと
 思っている人がたくさんいる。その人達のため
 にも除染活動を一早く終わらせなくてはいい
 けないと僕は思っている。

531 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 鈴木真凜

4年前の3月11日にその地震は起きました。
 私たちはまだ小学生で、当時は小学校の体育
 館にいました。いざ、地震が起きると体育館
 の窓ガラスが割れたり、物が落ちてきたりと
 とても大騒ぎで泣いている子もいました。家では、
 食器が割れ、本棚が崩れ、断水生活がし
 ばらく続きました。
 では、今はどうでしょう。道路は修理され、
 放射線量も減り、地震の前と同じような生活
 が出来ているように思えます。ですが、それ
 は全ての人ができることなのでしょうか。
 今でも仮設住宅に住んでいる人がいます。風評
 被害で困っている人もまだいます。穴きも
 浅っています。このようにまだまだ復興した
 とは言えません。私はこれからはその部分の
 復興が課題だと思っています。復興には何年、
 何十年かかるかわかりません。ですが、今の
 日本、今の東北ならば復興できると思います。
 そして、私も復興に協力できたいなと思
 います。

僕達が4年生の時に東日本大震災は起こり
 たくさんの方々に遭いました。その中で福島
 県は放射線による被害に遭いました。農作
 物が作れなくなったり、外で遊ぶ時間が少な
 くなったりなどです。しかし、そこから僕達
 は「人と人とのつながりの大切さ」を学びま
 した。ボランティアです。世界各地や全国か
 ら、被災地におとずれてかれきりて、まよを
 手伝、こいる姿やほ金してくれる人達をニ
 ーすや新聞を見てとこもすこいなと心から思
 いました。そして福島はどんどん復興してい
 きました。しかし今も仮設住居に住んでいる
 人達がたくさんいるので、こくも早くその
 人達をもと住んでいた場所にくらすことが私
 達のできる事だと思ひます。

そして今、私達がかき入れるべきことは福
 島を復興させるために、イベントや町おこし
 をしています。

533 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 藤田 魁羅

3月11日、僕らの人生を大きく変える出来
 事が起きました。東日本大震災という、大き
 な被害を受け、いまだ復興が完璧とも言えま
 せん、しかしここまでこいたのも福島の人だ
 けのおかげなく回りの助けがあ、だからこそこ
 こまで復興したのだと思います。今現在、仮
 設住宅で生活をしている人や避難生活をおく
 っている人も多々います。いまだ進んでいな
 いガシキの撤去、放射線による体への心配と
 約4年とい、た月日がた、ていても復興は進
 みません。今から20年前にも似たような被
 害を受けている所もあります。阪神淡路大震
 災です。お互いこうい、た被害を受けたから
 こそ学んだ事がたくさんあります。今福島県
 が出来る事は何か、今力を入れるべき所はど
 こかと、改めて考え福島県民一人一人が力を
 入れるべき所は生きるという事です。この被
 害で多くの命を失い悲しみにくれる人もいま
 す。だからこそ生きなければいけないのでし
 ょうか、僕はそう思います。

534 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 河野 颯馬

4年前、東日本大震災が起きました。この地震で福島県は、津波や土砂崩れ、そして原発事故などで大きな被害を受けました。

あれから4年がたち、福島は復興してきています。しかし、4年かた、た今でも完全とは言えない状況が続いています。僕の住んでいる地域では、津波もなく、放射能も比較的少なく、被害は小さい方でした。だから復興が進むのは他の地域より早か、たのです。その一方で、海をいの地域や原発の近くではさらに大きな被害を受け、今もまた自分の家に帰れない人もいような状況です。こうして考えると、福島県全体の復興は遠く感じます。

そして、被害はこ木だけではありません。風評被害もあります。原発事故があり放射能の影響で、福島の物が売れない時期もありました。4年た、た今、まずは福島県のイメージを良くすることが、福島の完全な復興につながるのではないかと思います。

535 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 鈴木 陽起

僕は小学四年生の時に東日本大震災を体験
 しました。その日は僕の誕生日の前日。
 次の日 ケーキが食べれると思、^合 行ったか
 とこのお店も休みた、あのロースニ（か）セキ
 にも休みました。地震が起きて何か変わと思
 います。テレビもつかず、電気も
 つかず、たし、水もきたなか、たず。
 日本は平和な国だけど、環境問題には対応不
 します。そこで被害があ、た県では復興す
 る所と、しない所の差があります。復興す
 る所は都会で人がたくさんいます。たけれど
 し、その所にも高齢者がたくさんいて早く復興
 するの協力してほしいと思、ているはずで
 す。たかたなるべく都会も田舎も早く復興し
 てほしいと思、ています。
 今度また日本に大きな地震が来ると言われ
 ています。それた亡くなる人、ケがする人
 たくさんいると思、います。身近な人が明日
 亡くなるかもしれない。たかた、毎日身近な人
 に感謝して生活したいです。

536

「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 根本 大雅

東日本大震災はいきなりや、てきました。
 体育館の姿があ、という間に、変わり果て。
 小学四年生の自分でも、わかるほどでした。
 いままでの日常がなくなり、コンビニエンス
 ストアなどでは、野獣と化した人々が食料を
 うばいあう光景がありました。テレビでしか
 見たことのない、こんな光景が、
 自分の目の前で起こるとは、少しま思、てま
 せんでした。テレビでは津波、ある一方では
 原発、そのようなことが毎日流れていました。
 すごい体験をしました。
 今でも、不便なことが多い日常が続いてい
 ます。もちろん、復興してりない市町村もま
 だあります。いつ、地震が来るか、ヒヤヒヤ
 してた時もありましたが、復興を支援する人
 々を見て、嬉しく、やる気があき、自分も
 ががんばろうと思うことができたということも
 覚えてります。今の自分がいるのは、この
 震災を通して、復興を支援してくれた人々の
 おかげだと思、ています。

537

「東日本大震災の体験談と復興への想い」

心豊原稿

氏名 藤井美佑

私が小学4年生の時に、東日本大震災が起
 こりました。すごく大きなゆれでした。大き
 なゆれを体験したことはい、私は、とても怖
 かったです。家の中もひどいことになっ、い
 ました。ほかの県では、家が流さぬいしまっ
 い、今も仮設住宅に住ん、いる人がた、くさん
 います。

3年たった今、い、も、その時のことを覚えて
 います。そして、その時のことを忘、れ、い、け
 ないし、ほかの人にも伝え、い、か、ないとい
 け、ないと思、います。

私は、東日本大震災が起、さい、学ん、だ、こと
 がた、くさんあります。その学ん、だ、ことを忘、れ
 ないけ、ないし、ほかの人にも伝え、な、く、い、け
 ないけません。地震や津波が起、さい、しま、ったと
 きに、東日本大震災の時のことを覚えて、い、い、し
 ば、多くの人が安全に避難できると思、います。
 二、れ、から、も、あ、の、日、の、こ、と、を、忘、れ、ず、に、い、い、
 ます。

2011年3月11日、私が小学四年生の時にその悲劇は起こった。多くの家は粉々に崩れていった。

あれから4年たとうとしてゐる今、復興は進んでいるのだろうか。周りをみると、やはりまだまだ復興できていない街がたくさんある。20年前に起こった阪神淡路大震災の時の復興はものすごくはやかった。人々が驚くほど。ではなぜ同じ日本という国なのにこんなにも違うのだろうか。たしかに神戸は大都市だ。交通の便がよくなければいけない。だから復興がはやかったのかもしれない。そう考えると、福島は人々にとってはどうでもよいのか。いろいろな都市なのか。と思ってしまう。なぜ復興する街としない街ができてしまうのだろうか。それは人々の考えの違いがあるからだと思う。福島はここまで人がいないから。なにと考える前に復興にかをいれることの方が大切なのではないのだろうか。

死	と	い	う	言	葉	が	頭	の	中	に	出	て	き	た	の	か	そ	の	
時	で	し	た	。	今	で	も	テ	レ	ビ	な	ど	で	地	震	に	つ	い	て
や	。	て	い	る	と	感	じ	ま	す	「	生	き	る	・	死	ぬ	」	の	言
葉	は	ど	れ	だ	け	重	い	の	か	と	私	は	。	こ	の	体	験	で	生
と	死	に	つ	い	て	よ	く	分	か	り	ま	し	た	。	で	す	が	地	震
で	の	問	題	は	街	に	つ	い	て	で	し	た	。						
四	年	あ	の	地	震	か	ら	た	。	て	ま	す	が	今	で	も	直	。	
て	な	い	街	が	多	く	あ	り	ま	す	自	分	の	街	は	。	も	う	地
震	の	爪	痕	な	ど	残	。	て	な	く	そ	ん	な	事	が	あ	。	た	の
か	も	分	か	ら	な	い	ほ	ど	で	す	。	今	で	も	自	分	が	産	ま
れ	育	。	た	街	に	戻	れ	な	い	家	が	な	い	が	れ	き	だ	ら	け
の	街	も	ま	だ	残	。	て	い	ま	す	。	震	災	当	初	の	ま	ま	残
て	い	る	所	も	あ	る	と	考	え	る	て	な	せ	直	。	て	な	い	の
か	分	か	り	ま	せ	ん	。	私	は	。	早	く	直	。	て	震	災	前	の
よ	う	な	街	に	全	部	无	通	り	に	な	。	て	ほ	し	い	で	す	。
私	は	。	あ	の	地	震	の	お	か	け	で	今	後	災	害	が	あ	。	
た	ら	ど	う	ち	れ	ば	い	い	が	大	切	な	事	が	分	か	り	ま	し
た	。	こ	の	体	験	は	。	未	来	ま	で	す	。	と	残	し	て	い	か
な	け	れ	ば	い	け	な	い	ス	ト	ー	リ	ー	た	と	思	い	ま	す	。

X東日本大震災で僕はたくさんの事を自然
 から学びました。僕の親戚に双葉町に住んで
 いた人がいます。僕はその親戚に自然の恐さ
 を教えてもらいました。その親戚は津波で自
 宅が無くなりました。地震が起きた時に高台
 へ避難し、自宅を見ていた時、津波によつて
 いても簡単に自宅は壊されたと言っていました。
 その親戚は、現在白河の仮設住宅に住ん
 でいます。そして福島には原発の問題がのし
 がかつています。国は早期回復を望んでいる
 ようですが、2014年、12月に行われた
 選挙では膨大なお金を使っています。僕は選
 挙をする前にそのお金を復興に使えばいいだ
 ら回復したのが今、知りたいです。
 福島は少しずつ復興が進んでいますが、人
 の心の復興はまだまなかと思っています。
 僕は人々の励みになるような復興をしてほし
 いと思います。国と県がつながるような
 動きをしていくとも、早く復興が進んで復
 活は思っています。

541 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 兼田 拓実

僕は、その時六年生の卒業式の練習をして
 いました。式が終わり出ようとするとき、いき
 なり地面が大きくゆれ、体育館の窓や、天上
 にひ、かが、こいたボールなど色々な物が落
 ちてきました。大きさは地震が止ま、でも、手
 につぎに来る余震のせいで震災の時はおむね
 手に入りました。僕は地震の怖さを始めに
 知りました。そのつぎの日に、地震によつて
 津波が起きた原子力発電所が爆発しました。そ
 のせいで放射能が出過ぎて、外にでる水ま
 せんでした。

あれから四年が経ち復興ではまに、あの時
 と変、こはい物があります。沿岸側に住んで
 いた人は津波で家を失、た人や、原発の影響
 で、より近く自分の家に帰るはい人達がたくさん
 います。

今一番やうはいちいけはいのは、仮設住宅に
 住んでいる人や自分の家に安心してよりよい
 生活を送れるようにした方がいいと思います。

542 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 穂積 悟

僕は、四年前に東日本大震災を体験して、
 あの頃はまだ小学四年生で、怖かったという
 イメージしかなかったけど、今思うと大切な
 体験をしたと思っています。なぜなら、四年
 前までは地震が来たら、どう対応したらいい
 のかなどろがらなかつたけど、四年たった今
 では、どう対応したらよいかどう行動すれば
 よいか、今ではわかっていきます。だから僕は
 大切な体験をしたと思っています。

四年たつて今では、地震が来なかつた時の
 ように普通に生活しています。だけど今でも
 頭の中からは、ぬけません。四年たつた所で
 復興した街があり復興してない街があります。
 少しでも早く、復興してくれんことを願って
 います。

僕は一つ考えていることがあります。それ
 は、今後災害が起こった時です。災害はいつ
 起こるか分かりません。なので、いつ起こっ
 てもあせさずにいかによく考えて行動できるよう
 にがんばります。

543 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 荒井麻緒

私達が体験した東日本大震災は一生忘れる
 ことの出来ないものですよ。この出来事を通して
 学んだことはたくさんあります。感じたこと
 もたくさんあります。その中でも、日本とい
 う国だからこそ乗り込んできたんだなあ、と
 思うことがあります。

日本だから出来たことは、この大震災は
 東北地方を中心に起った災害であり、すこ
 く苦しんだのは東北地方であらうけれど、東
 北地方以外の都道府県の人々も東北地方を
 助けてくれたり、支えてくれたりしてくれま
 した。このように助け合うことが出来た、同
 じ気持ちになれた、たくさん人がいる国は日本
 だけではないかと思いました。

今後もしもまた大きな災害が起きると言わ
 れています。そのときは、私達が助けていき
 る国から支え合える国でありたいです。

544 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 緑川 りな

私が小学4年生の時東日本大震災が起きま
 した。また、授業中で私達の学年は体育館に
 いました。すると、突然大きな揺れが来て窓
 がガラスが割れて天井の電気は揺れて落ちてき
 るので、私達は外に避難しました。私は4年
 た。た今でもこのように覚えています。

その後、地震で福島原発が爆発し私達の県
 は放射線の影響を受けました。しかし、そん
 な被害を受けた私達に世界中の人達は復興す
 るための活動の手助けをしてくれました。そ
 のおかげで少しずつ復興してきています。

私は実現できるかわからないけれど、福島
 のために原子力発電所を置かず違う場所に置
 いてほしいこと、今仮設住居に住んでい
 る人達のために廃棄物を処理できるようにし
 て地元で暮らせるようにしたいです。それに
 一番大事なものは、形だけでなく被災者の心の
 復興です。震災で心に傷を負った人達はたく
 さんいるので、そのサポートもしてあげるよ
 うにしたいです。

545 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 小嶋 洗斗

三	月	十	一	日	あ	の	日	の	地	震	で	僕	達	の	生	活	が		
崩	れ	て	い	っ	た	。	僕	達	は	そ	の	日	小	学	校	四	年	生	で
卒	業	式	の	練	習	を	し	て	い	た	。	そ	ん	な	時	「	ド	ガ	ッ
と	い	う	豪	音	と	と	も	に	地	震	が	僕	達	を	襲	っ	た	。	椅
子	の	下	に	速	や	か	に	避	難	し	た	が	動	き	は	と	て	も	強
く	ガ	ラ	ス	は	割	れ	、	天	井	に	た	ま	っ	て	い	た	ほ	こ	り
な	と	が	落	ち	て	き	た	。	幸	い	ヶ	ガ	人	は	い	な	く	全	員
無	事	だ	っ	た	。	家	に	急	い	で	帰	る	と	家	の	物	が	全	部
倒	れ	て	い	た	。	テ	レ	ビ	を	つ	け	る	と	津	波	が	発	生	し
て	い	て	、	そ	れ	を	見	る	の	は	と	て	も	嫌	だ	っ	た	。	
◇																			◇
今	現	在	、	四	年	の	月	日	が	た	ち	福	島	県	の	原	発	は	
い	ま	だ	に	お	ど	う	し	て	い	な	い	。	津	波	で	全	て	流	さ
れ	て	し	ま	っ	た	人	々	、	ど	ん	な	心	鏡	で	住	ん	で	い	る
か	は	嫌	と	い	う	ほ	ど	あ	か	る	。								
四	年	前	に	起	き	た	大	災	を	今	僕	達	は	記	憶	の	ど	こ	
か	に	秘	め	て	い	た	か	も	知	れ	な	い	。	忘	れ	て	し	ま	う
入	も	い	る	か	も	知	れ	な	い	。	今	後	ま	た	大	き	な	大	地
震	が	来	る	か	も	知	れ	な	い	。	来	っ	て	お	ら	で	後	悔	す
る	の	は	遅	い	の	だ	。	今	、	何	を	し	な	く	て	は	い	け	な
い	の	か	、	考	え	な	く	て	は	い	け	な	い	の	が	課	題	で	す

ぼくが、東日本大震災で体験したことは、
 これまでにない不便な生活でした。水道水が
 使えなくなり、お風呂に入る時、いとこの家
 に行き、入るしかなかく、料理も、良い物を作
 れなくなりました。たいていすごく不便で生活がめんど
 くさいと思ったこともありました。そして学
 校に長い間行けなくなり、友達とも会えなく
 なりました。こんなことも、人生の中で起こ
 るのかと、心の中で思いました。
 ある時 テレビを見ると、みるにたえない無
 さんの映像が流れていました。それは本当に
 福島県の光と目を凝らしました。津波が町まで
 おし寄せてきたり、原発が爆発したりと、い
 るいゝ事が起きており、うやばいなと思っ
 ましたが、その中で復興をしている人がいて
 すごくいいなあと思いました。自分はそのこに行け
 ないと思うけど、みんなが前の生活に戻ると
 うにがんばってほしいなと強く思いました。

547 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 深堀 大地

あ	の	日	は	。	当	時	4	年	生	た	っ	た	僕	達	は	6	年	生		
の	卒	業	式	の	予	行	練	習	を	完	璧	に	通	し	て	で	き	た	日	
だ	。	た	。	み	ん	な	が	満	足	そ	う	な	笑	み	を	浮	か	べ	て	
い	る	と	突	然	。	体	育	館	が	揺	れ	始	め	た	。	揺	れ	は	な	
か	な	か	収	ま	ら	ず	と	人	と	人	激	し	さ	を	増	し	て	い	き	
窓	が	ラ	ス	な	ど	も	落	ち	て	割	れ	た	。	揺	れ	が	収	ま	っ	
て	か	ら	。	全	員	で	外	に	避	難	し	た	。	怖	く	て	泣	い	て	
い	る	人	も	い	た	。	自	分	は	ど	う	ま	れ	ば	い	い	の	か	分	
か	ら	な	か	っ	た	。														
そ	ん	な	日	か	ら	。	も	う	4	年	が	経	と	う	と	し	て	い	。	
る	。	今	は	。	見	立	っ	た	震	災	の	爪	跡	は	無	く	な	っ	て	
さ	た	。	し	か	し	。	完	璧	に	復	興	で	き	た	訳	で	は	な	い	。
今	も	仮	設	住	宅	で	住	ん	で	い	る	方	。	放	射	能	の	影	響	
で	家	に	帰	れ	な	い	方	が	た	く	さ	ん	い	る	。	そ	の	た	め	
一	刻	も	早	く	放	射	能	問	題	を	解	決	し	。	家	で	安	心	し	
て	暮	ら	せ	る	よ	う	に	。	人	々	の	不	安	を	取	り	除	く	事	
が	最	優	先	で	あ	る	。	こ	の	た	め	に	福	島	県	が	一	丸	と	
な	っ	て	解	決	し	て	い	く	こ	と	が	必	要	な	と	思	う	。		

(20文字 × 20行)

大切な物が消えてしまった。た。東日本大震災。あの日、姉と弟は小学校を欠席していて、自分一人が学校に行っていた。卒業式の練習をしていた。ちょうど6年生が退場した時に、体育館が大きく揺れた。窓が外れ、上を支えていたネジが何本かが落ちた。世界が一瞬で変わった。不安とまよいが同時に脳内をうめつくして全てが白く見えた。これが恐怖を味わうということだ。た。

あの日から4年がた、た。家族は一人も欠けることなく無事だ。た。津波の問題はなかつたものの放射能の問題がおきていた。どうせ、たら放射能を取り除くことはできるのたろうか。祖父からは、「ウカメを喰え」と言われます。でも、自分が変わっても周りには変わらない。一刻も速く全てが戻るように願う。

今、何をがんばればいいのか。を常日頃考えていた。やはり勉強しかないと思いました。非難して満足に勉強ができない人のために、勉強をがんばる事が道筋だとわかる。

549 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 中根 南海

私達が体験したあの4年前の東日本大震災
 は、私達にとり、忘れられないものだ
 だ。東日本大震災を通して学んだことは、友
 達のいのちの大切さだ。あの時、友達がいけな
 ければ私はいじめられかたかもしれなかった。これ
 が東日本大震災を通して私が学んだことだ。
 今では、4年前よりも安全にして過ごせる。
 だが今でも道路や家が壊れていけな所があ
 る。私達の街は復興しないう。しかし神戸は
 復興する街。なぜかと言うと神戸は発展して
 いる。私も私達の街は神戸よりも発展して
 いく。そう考えると私達の街は、いつ復興す
 るのか。そして復興できるのかであろうか。私
 達も力を合わせ復興できる街にしていこう
 と思う。

今後、4年前のようにならないように、
 しっかりと家族や友達のことを大切にしてい
 たいと思う。

550 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 緑川 右馬

東日本大震災があつた時、僕は小学校
 四年生でした。その時、卒業生の練習をして
 いる最中でした。突然、地震が起きました。
 その揺れが、とつと大きくなり、感じたまのり
 けうがもつた。そして僕は、椅子の下
 に隠れました。すると天井が、たたく音が
 した。そして、かうも動いてきた。僕は
 このとき、まよりの大さな地震が起きたこ
 とに怖く思いました。そして、家に帰り、し
 ても見ると、津波が流れてくる様子が見
 ました。
 今、福島には、まだ原発があり、原発の近
 くの地帯は復興していません。そして海の近
 くの家の、津波で流された今もそのままだ
 僕は、福島を早く復興してほしく思いま
 します。
 今後、この大震災の被害がある、な時は、ホラ
 とティアをたたく、はやく復興させる事
 大切だと僕は考えています。